

令和元年9月4日現在

機関番号：42302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16848

研究課題名（和文）「自動点字翻字が容易な日本語文」構築のための日本語点字文研究

研究課題名（英文）Research on Japanese sentences that are easy to transliterate ink character into braille

研究代表者

中野 真樹 (NAKANO, MAKI)

関東短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：30569778

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：日本語点字はかな専用文のため、同音異義語の読解への影響や漢字かな交じり文と比べた場合の可読性について疑問が呈されることがある。しかしながらそれらの疑問に関しての計量的な調査については数少ない。そこで、墨字から点字への翻字の際に同音異義語に付与される点訳注および点字文と墨字文の語種比率についての調査を行ったところ、点訳注の付与は語の「なじみ度」と関連していること、また語種比率はかな専用文である点字文の特徴的というものは見いだせず、従来研究されてきた掲載媒体の特徴との共通点が多く見られた。かな専用文における同音異義語の錯綜への懸念については、漢字不可欠論等との関連から考察していく必要があるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語点字は視読文字である墨字とは異なり、公的な表記としては漢字かなまじりではなくかな専用文で書かれる。そのため、世界の多くの言語の表記法と同様に表音文字で書かれ、わかちがきを行うという特徴が見られる。本研究では、歴史的蓄積のある日本語点字の文体的特徴のなかには、「漢字を使わない」ことによる影響というものは特に掲出されることはなく、それよりは点字文の文体的特徴は書き手の属性やその文章が掲載される媒体の影響の方が大きいということが指摘できた。これは日本語も世界の他の多くの言語と同様に、表音文字と分かち書きによる表記が可能であるというこれまでの文字研究の成果を補強するものであるといえるだろう。

研究成果の概要（英文）：Since Japanese braille use only kana, concerns came out. Concerns that using only kana sentences homonyms and kanji-mixed sentences homonyms might differ or influence the reading comprehension and readability. Few quantitative surveys were done to figure out these concerns.

This study found out that when the transliteration from ink character attached to braille transliteration with translation notes “familiarity to the related word” was possible. Moreover, it was also found out that the characteristic of braille sentences, which are dedicated sentences, did not change much even if it was in the word-type ratio, e.g. wago, gairai-go and kango, nor with the characteristics of the conventional publishing media. Concerns about homonyms to kana dedicated sentences should be considered in relation to the essential characters of kanji.

研究分野：人文学

キーワード：日本語点字 点字表記

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本語点字はかな専用文であるため、しばしば漢字かな交じり文と比較した際の可読性について、特に漢語同音異義語のとりちがえが起ころはしないか、という疑問が呈されることがある。しかしながらそのような点字文に関する研究はこれまであまり行われておらず、また、日本語学文字論研究の蓄積からも、それを裏付けるようなものは表れていない。そこで、実際に日本語を点字で書く際、同音異義語を中心とした漢語の読解になんらかの影響があらわれるのか調査を行う必要があった。

### 2. 研究の目的

本研究は、日本語点字文の文体的な特徴をあきらかにすることを目的としている。かな専用文であるという特徴を持つ日本語点字文が、その表記によって墨字文とは異なる「読みやすさ」のための工夫がなされているとしたらその点はどこにあるのか、また墨字文を点字文に翻字した際、「疑問」が呈される漢語の読解の困難さが生じるのだとしたら、いったいどのようなものか、そしてその頻度・程度について明らかにしたい。

### 3. 研究の方法

本研究では、2種類の調査に着手した。

(1) 墨字を点字に翻字するさいに付与された点訳注である。点訳注は点字の読解のために独自に使用される訳注であり、同音異義語の取り違えを防ぐ手段と説明されることが多い。そこで、点訳注が実際にどのような語に付与されているのか、計量的な調査を試みた。

(2) 点字文の語種比率の調査である。かな専用文での可読性への影響が懸念されるのは、多くは漢語である。そのため、実際に影響が出るのであれば、点字文と墨字文では漢語の使用状況が異なっていることが予想される。そこで、これまで文体論研究のなかで文体特徴をはかる指標の一つとされてきた語種比率に着目した。漢語・和語・外来語の語種比率は文章の硬軟といった印象に影響し、また掲載媒体により数値に特徴が表れることが知られている。そこで、かな専用文の文体的な特徴が表れるかどうか、また現れたとすると具体的にどのような特徴があるのか、調査を行うこととした。調査対象として、計量的文体論研究の蓄積がある新聞媒体を選定した。点字文による新聞としては、大正期から発行され続けており、点字使用者の読字に大きな影響を与えてきた「点字毎日」がある。そこで、この「点字毎日」と墨字で書かれた新聞との語種比率を調査し、かな専用文としての点字新聞にどのような文体的特徴があるのか、調査を行うこととした。

### 4. 研究成果

(1) 点訳注の調査については、以下のようにまとめられる。まず、現在点訳注はなるべく付与しない方針であることが多く、分析可能なまでに用例数を採取するには多くの点字文献にあたる必要がある。しかしながら、文章の書かれる時代・分野ごとに付与される訳注の特徴はさまざまであり、「点字文に付与される点訳注の特徴」としてまとめてしまうことは分析の正確性のためにはやや懸念の残るものである。

また、点訳注の付与には参照できる一定の基準によるものというより、点訳者・校正者の判断が入ることも多い。

点訳注の傾向を分析するためには、今後さらに研究範囲を拡大して、用例数を増やし、精密な分析をする必要を感じた。それをふまえて、現段階の点訳注の特徴を述べると、点訳の際に必要な漢字の注釈というよりも、なじみのない語への語釈が多くあった。

また、同音異義語が存在する漢語については、かならずしも点訳注が付与されているわけではなく、文脈で判断できるものについては付与がない。そして、「偏在/遍在」などの語に代表される文脈での判断が難しい語については墨字においてもあらかじめ避けられているという点も考慮に入れる必要がある。

点訳注が付与されるのは漢語のみにとどまらず、和語にも付与されており、いずれも該当する文章の読者を想定し、その読者に対してなじみ度が少ないだろうと予測されるものに対するものであった。このとき、文章の掲載媒体の読者層により、その「なじみ度」は変化するものであり、「点字文そのもの、点訳注そのもの」の特徴と言えるものではない。現段階ではさまざまな研究手法上の課題があり、それらについて検討しつつ今後、さらに調査を継続していく必要がある。

(2) 点字新聞と墨字新聞の語種比率については、以下のようにまとめられる。

点字新聞の語種比率については、漢語の比率が多くあることがわかった。

その数値は先行研究でみられる新聞媒体における語種比率と共通するものであった。実際、点字新聞と墨字新聞の語種比率について比較したところ、特に点字新聞で漢語の使用が控えられているなどといった特徴を見出すことはできなかった。

ここから、漢語の割合が高いという傾向にあるメディアである新聞記事において、かな専用文である点字文で表記による文体への影響というものは観察することはできなかったことがわかる。点字新聞の文体的特徴は、墨字で書かれた新聞の文体的特徴とよく似たものであるといえる。

点字文か墨字文か、という表記の差が文体に与える影響はあまりみられず、かな専用文である点字文であっても、掲載媒体によっては漢語比率が高くなる場合もあることが明らかとなった。

以上をまとめると、点字文か墨字文かといった表記上の特徴よりは、文章の掲載媒体・読み手が文体に及ぼす影響のほうが大きく、現段階では「点字で文章を読む場合、同音異義語で困るのではないか？」という疑問を裏付けるようなものは見いだせなかった。

この結果は、日本語文において漢字使用が読解に強く影響をあたえるものではないとするこれまでの文字・表記論研究の成果とも合致する。

冒頭に紹介した「疑問」は、「疑問」の体をとった観念形態の可能性も考えられ、今後、漢字不可欠論との関連について精査していく必要があるだろう。

今回、「点字文の特徴」というものを指摘することは困難な状況であり、表記の特徴よりはさまざまな点字文の書き手・読み手の相違・多様性を考慮に入れなければ日本語研究における日本語点字文の文体研究としては十全のものではないということが明らかとなった。

点訳注については、あくまでも補助的な役割として付与されているものであるという認識もあり、また分析に耐えうるだけの用例数を確保することが課題ということもあるが、日本語点字文の読解と文化を支えるものであり、言語的な資料価値も高い。今後も長期的に用例採取と分析を行い、研究結果の公表へとつなげていきたい。

また、点字文の語種比率についても今後も調査を継続していきたい。点字使用者の多様性を考慮し、調査対象は新聞のみならずさまざまな分野に拡大していく必要がある。また、点字文は明治期からの資料の蓄積があり、経年的な調査も有効であろう。日本語点字の文体がどのように変化していったのか、調査することには意義があるものと考えられる。今後は、これまでの本研究の調査結果の公開の機会について検討し、またさらに多角的な研究方法を用いて日本語点字文の研究を行っていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

中野真樹(2019)「現代日本語表記に漢字は不可欠なのか 日本語点字研究との関連を中心に」『関東短期大学紀要』61, pp.21-29, 査読無

なかのまき(2017)「点字と墨字のわかちがきについて」『ことばと文字』7, pp.129-136 査読無

中野真樹(2017)「日本語点字のわかちがきについて 学校国文法との関連を中心として」『日本近代語研究』6, pp.77-92 査読有

〔学会発表〕(計 1 件)

中野真樹「日本語点字に見られる語彙について “漢字がないと日本語文は読みにくい”に根拠はあるのか」国学院大学福祉言語学研究会(2017年12月3日、国学院大学)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。